再掲載

特集　子どもの中に形成を期待される力

育てる誌合併号（643・644）の座談会では、私たち育てる会が子どもたちに形成を期待する「力」についてふれましたが、今号では、その一つひとつの力について、もう少し細かく具体的に見ていきたいと思います。

●出典：「育てる」通巻127・128号　昭和54（1979）年2月25日発行、134号　昭和54（1979）年8月25日発行

育てる会における体験教育の理念と六つの力

青木　孝安（財団法人育てる会　理事長）

その理念とは

これからお話しいたします育てる会の体験教育の理念は、長年の実践活動から導き出されたものです。初期の頃、わたしたちは、ただ子どもたちを大自然へ連れて行く、ということだけで出発したのですが、そのうちにどんな活動をどのようにさせるべきかという疑問から、指導者による幾度かの研究を重ね今日にいたりました。その研究実践の総括が、育てる会の理念となったのです。従ってこれは単なる理論でなく、実際に参加する子どもにとって確実に教育効果をもたらすはずの実践理念です。

この育てる会は学校教育の分野から社会教育の分野に進出したところに特徴があります。実はこれはわたしが学校教育にいたころ、社会科や理科の授業で子どもたちの思考の足しとなる生活上の知識が、あまりにも貧弱で不確かであることに驚き、体験による基本的知識の必要性を痛感したことと、都会っ子、核家族っ子特有の無気力、依頼心の強さは、大自然での野外活

動によって改善されると考えたからです。

したがって、育てる会の理念は、基本的に(1)子どもたちの様々な体験活動と、(2)それによる生き生きとした子ども、という二つの柱から展開されています。

育てる会の野外活動に参加した多くの子どもたちを観察したり、保護者の感想を総合しますと、どの子もとにかく生き生きとした子どもに変わるというのです。もちろん子どもによって差はあるのですが、とにかく活動的となり、自信がついてくるのです。

わたしたちは、この理由を子どもの感想文、子どもとの会話、そして保護者たちの意見に求めてみました。そしてその中から以下の六つの要素を導き出しそれに「力」をつけて捉えることにしました。

六つの要素とは

A. 心の安定力
B. 行動力
C. 共存力
D. 個性力
E. 工夫力
F. 詩情力

この六つの「力」の源が「それぞれの目的をもって喜々として生きている子ども」を成立させているのです。

「力」という捉え方

「力（りょく）」という捉え方について、疑問をはさむ人や不自然だという人もあります。

○○能力とか、○○性ということばをつけたらという意見もありましたが、こうしてしまうとどうしても子どもを、その時点で静的に捉え易いニュアンスを持ったり、また評価的な感じになったりします。ところが、○○力というと程度の差は問題でなく、要するに、その子がそういう力を機に応じて発揮できるかという可能性への期待も含まれてきます。生きるためには「力」が必要であり、その力を野外活動で養うという考え方です。

この考え方は、やがて大人になった時「人間力」という捉え方に発展します。

では、六つの力について説明いたします。あなたのお子さんを念頭においてお読みください。

「心の安定力」

子どもが自分の存在についてよりどころとなる安定

感を持っていますか。子どもらしい笑顔が心にありますか。要するに心の健康のことです。

わたしの今までの経験ですと、最近の子どもは十人のうち七、八人までが、大なり小なり何らかの心の病を持っているといって決して過言ではありません。

考えてもみてください、大気汚染、交通ラッシュ、という都市化社会、受験競争、テスト、核家族、過保護、遊びの欠如。これでは大人だって心の病気にかかります。

わたし共の野外活動に参加した子どもたちが家に帰りたくないということばの裏を分析しますと、皆こうした社会・家庭環境の劣悪さと結びついています。

長期の山村留学に参加した子どもたちが、一学期を終る頃になると皆一様にすがすがしい笑顔をとりもどしてくる事実をみるにつけ、この心の安定力こそ今の子どもたちに補償してやる大人の責任があると思います。

いったん心に安定力をとりもどした子どもは、再び悪い環境に置かれても、自分で安定をとりもどす再生能力を持つことも確かです。

「行動力」

この力も年々少なくなってきています。人から命令されたり許可を受けたりしなければ行動できない子どもが多くなっています。指示があれば行動する子は、宿題があれば勉強する子と一致します。あなたのお子さんは「ぼく、やってみるよ」といって進んで行動をおこしたり、体を動かす中から物事を知り判断したり、自分の考えを進んで行動に移す力がありますか。幼児・低学年時の遊びが大切です。

「共存力」

これは要するに人とうまくやっていける力のことです。この力が不足がちな子どもは、近年、過保護、少人数家族の子どもに多くみられます。

この教育の必要を強く感じている親も年々多くなっています。この目的のための教育方法は集団寝食生活が最も効果的です。

人を指導する力と人の指導に従う力を兼ね備えて持つことこそ共存力の要です。

「個性力」

「個性」あるいは、初等・中等教育の段階では、

もっと広い視野で捉えて「特性」という言葉でもいいかもしれません。

「個性（特性）」というのは、その子らしい特徴を発揮して生活しているかということです。つまり、その子がその子として、解放された自由を持っているかということになります。もう一つ別の表現を使えば、その子が持っている色々な力を、自由に発揮し、その子らしい軌跡を描いて生活しているかということです。

一見、静かでおとなしい子どもでも、何か興味を持った事をコツコツとやり、その内容が、出来、不出来は別にして、その子らしい特徴を持っていることなどもその一例です。

このような「個性（特性）」を持つということは、行動面にしろ、知的面にしろ、集団の中での本人の存在感に自信を持たせるものです。また、学級の中になんとなく目立たない子というものが必ずいるものですが、こんな子も「個性（特性）」力が乏しいといえましょう。こうした子どもは、概してどことなく精彩がないのです。精彩がないということは、その子の心や諸力が眠っていることです。この眠りからさめさせる必要があります。それこそ進んで、各種の野外活動に参加させることによって眠りからさめさせることです。

「工夫力」

これは簡単に言って、〝失敗を積み重ねられる力〟と言えましょう。この、子どもたちに工夫の場を与えるということは、近年ますます少なくなってきています。今はいろいろ考えて工夫をすることより、大量の知識を受験に備えてベルトコンベアのように、どんどん子どもの中に流し込むことに夢中になっています。

子どもというものは、幸か不幸か適応力がありますから、その時はそういうものだと思って一生懸命知識を受け入れます。こういう生活を続けるうちに、恐ろしいことに子どもの時代、発達段階にそって養われなくてはならない自主的な試行錯誤の能力の発達は、まったくストップされてしまいます。

こうして成長した子どもが青年時代、あるいは大人になって一つの困難に遭遇した場合、どのように対応するのでしょうか。おそらく対応するすべを持ち得ないでしょう。

幼児は幼児の時代、中学生は中学生の時代に適した

失敗を重ね、試行錯誤をする体験をどうしても与えなければなりません。

この体験の場は、机の上には絶対ありません。

「詩情力」

詩情とは心から酔うことです。美しいものにふれた時、その美しさに打たれて心が酔える力を詩情力といいます。また悲しいことにふれた時、やはり心に涙することができるかということです。

美しい秋景色を前にして、「ね、君、美しいだろ」といっても、「どうして」という返事が返ってきてがっかりすることがあります。心の中で〝ジーン〟と感じるだけの心のゆとりが無いのでしょうか、または美しいものにふれた経験がなく、それを美しいと知ることができないのでしょうか。

わたしは、自然の動物や昆虫を極めて残酷にあつかう子どもたちをみて恐怖を感じたことがあります。こうしたことも、やはり詩情の欠如と深くかかわりあっていると思います。

乱暴な子でも、成績の悪い子でもいい。この詩情の心だけは育ててゆきたいと思いませんか。

六つの「力」は相互に関連している

これまで、「喜々として生きている子ども」を成立させる六つの「力」について簡単にのべました。

ここで大切なことは、この六つの「力」は相互に関連し作用し合って成り立っているということです。

例えば心の安定力は行動力や共存力なくしては成立しませんし、詩情力には心の安定力がどうしても必要です。

このように、一応六つの要素に分けましたが、これらは一つとなって作用するものであるということと、この六つの要素は子どもによってその能力の所有の仕方に強い弱いがあり、それはそれで良いのではないかということを申し上げておきたいと思います。

さあ、みなさん。あなたのお子さんについて以上のべた六つの力を検討してみてください。

六つの「力」を育くむ、育てる会の体験活動

育てる会では、六つの「力」を子どもの中に育むために、様々な体験活動の場を子どもたちに提供しています。

こうした力は、体験活動に参加したからといって、

目に見えて変化が現れたり、数値的に評価できるものではなく、じわじわと子どもの成長とともに発揮されるものだと思います。

長期山村留学を経験した子どもたちの感想には、そんな一端がみられますので、いくつかご紹介したいと思います。

●出典：「育てる」通巻280号　平成3（1991）年11月25日発行

山村の木造校舎の先生になりたい

一期生（四年生時留学）

山村留学した事は私にとってすごく自慢で友だちにもどんどん話しています。アケビや蜂の子を食べた事や、川遊びにスキー、農家の一員として暮らした事、それから知らない人とでも挨拶できる村の事などです。特に両親に感謝しているのはとにかく自然体験です。「自然をこよなく愛するようになった」と言うんでしょうか、休みになるとみんな新宿なんかに遊びに行きたがるのに私は山の方に行きたくなっちゃいます。

それからもう一つ両親から離れた事も大きかったです。それまでは、そんな事なかったんですが、八坂小学校から両親が帰って行くのを見て涙がいっぱい出ました。死ななきゃ食欲が無くならないと言われている私が、食事がのどに通らないという悲しみを、生まれて初めて体験しました。帰って来てから以前よりも両親が好きで好きでしようがなくなりました。一年離れていた反動からか、親のありがたさを実感したんだと思います。当時は二年目残る人が信じられませんでした。あとで「どうしてもう一年残らなかったんだろう」とは思いましたが。

山村留学をＰＲするとしたら、一つは親の大切さがわかる事、そしてやっぱり能動的になれることだと思います。作られたもので遊ぶんじゃなくて、自分たちで作ったもの、自然で遊べる事です。今の子はその楽しさを知らなくてかわいそうだと思います。

今私は「木造校舎の先生」になりたいと思っています。素朴でいっしょう懸命遊ぶ子たちにまじった先生でありたいんです。やっぱり自然の中がいいですから。

これからの山村留学については、育てる会によって村を変えないでほしいと思います。

八坂での一年は後になって開くものがいっぱいつめられた一年

三期生（六年生時留学）

八坂での一年半、嫌な思い出ってないんです。楽しくなかった事や「つらかったなあ」と思う事、慣れるまでの大変さはあったと思いますけど、それは嫌な思い出じゃなくて、〝いい経験、というか勉強〟だったんです。

一番よく思い出すのは、四季を通じて土林から見た鷹狩山と切久保の風景なんです。あそこまで帰って来ると「もうすぐ家だ！」という気がして、今でもあの風景を思い出すと気が紛れてほっとするんです。他にも農家からの村の日暮れとか、切久保の明りが見える峠とか、なんか風景の印象が強いみたいです。

八坂での生活が私に与えてくれたのは、まず〝やる気〟だと思います。八坂村には自由な時間と私の興味を引く物がいっぱいあって自分で見つけていろいろできたし、センターでは自分たちではわからない事、知らなくてはできない事をいろいろやらせてくれました。

「自分たちでやりとげる」充実感、やらせてもらってみて「できるんだ」という自信につながったと思います。「〝やる気〟をおこすチャンスがいっぱいあった」という事だと思います。もともと引込思案ではなかったのですが、東京に帰ってから友だちに「行く前よりもすごく積極的になったね」と言われました。当時自分では変ったなんて思ってなかったんですけど。

それから忍耐力、というか我慢する事を覚えた事も言えると思います。いくらとけこんだとはいえ「他人の家」での生活、そしてセンターでの集団生活の中で、初めて「自分で意識して我慢する」という体験をしたんです。みんなが右というのに私だけ左とは言い張れない場面もあった訳です。「集団の和の為に我慢する事」だったんだと思います。

農家ではそれに加えて「両親のありがたさ」「家族の楽しさ」を改めて感じました。自宅が飲食店のため家族で食事する事が無かったので、みんなで畑仕事してみんなで食事するというのが楽しかったんです。

八坂小ではそれまでの学校というイメージが変わりました。勉強する所、時間になったら帰る所、ではな

かったんです。先生の存在がとても身近で「わかってくれている」という感じが強くありました。少人数なので一人ひとりの役割も重要でしたし、一年生から六年生まで縦割りの掃除は、上下関係を自然に教えられたすごい事だったと思います。

しかし何よりも大きいのは、やはり自然に接していた事だと思います。ゴチャゴチャしたリズムの速い都会生活の中で流されてしまうんじゃなくて、大きく広く深い自然の中にどっぷりつかっていろいろ考えた、考えるチャンスを与えてくれた時期であったのだと思います。人の原点というか切り離せないものが〝自然〟だと思います。

「山村留学の一年で変った」というのはウソだと思います。私も「自分自身変ったなあ」とはなりませんでしたから。八坂での一年は、後になって開くものがいっぱいつめられた一年だと思います。少なくとも私はそう信じてこれからも一生懸命いろいろやるつもりです。実際に私の中での山村留学は修園の時、二年後、そして今と変化しています。八坂は小さな私の魅力の一つですから。

いつまでもあの頃のままの八坂であって欲しいです。

多様な体験は意識以上のインパクト

二、三、四期生（中学生時留学）

山村留学した事は僕にとってすごくでかかったです。と言うより、もし行ってなかったらどうなっちゃっていたかわからないって感じです。

すぐ「カッ」となるタイプで、喧嘩ばっかりしてたのが、中学の三年間八坂に行ってから落ち着いたって言うかぜんぜん怒れなくなったんです。もちろん八坂へ行って早く友だちを作りたくて、僕自身我慢したという事もあると思いますけど、村の友だちがやさしくて喧嘩する理由が無かったからだと思います。何か「くれ」と言われても、都会の子だったら「いやだ」と言うのに、村の子は「これはあげられないけどこっちあげるね」と言う感じです。それから、最近強く思うんですけど、人にも〝なわばり〟って言うか、他の人との間に必要な空間みたいなものがあると思うんですが、それが八坂にはあったんだと思います。今の生活

でもゴミゴミして、特に朝のラッシュなんか本当に〝ムッ〟としますからね。そしてあの自然があるから、ゆったりとしていて都会と〝時間の流れ〟が違うような気がします。自然の中で「ボーッ」とできるっていうのは大きいと思います。

農家はどうしても他人の家だから、うまくいかなかった事とか、すごくつらくて嫌だった事もありました。でも今あれがすごくプラスになっているような気がします。あの頃は自分の前だけしか見られなかったし、自分だけの思い込みみたいなものがあって、嫌でたまらなかったんですが、今考えると「僕の為に一生懸命やってくれたんだなあ」と思います。言ってみれば、あの嫌な思い出が、我慢する事、相手の立場に立って考える事を教えてくれたんだと思います。

とにかくあの三年間、こっちにいるよりずっといい事をしたような、得をしたような気がします。小学校の頃から行っていればもっと楽しかったろうなと思います。

八坂に行ったらすぐこうなるっていうのは、自慢話になるくらいで無いと思います。でも、僕は救われたんです。それから帰って来てから何故か両親にぜんぜん怒られなくなったんです。人間ができて来たんだと思います。

もう一つ、今思うのは「山村留学が終ってからが本当の山村留学だ」という事です。これからもしっかり山村留学して行こうと思っています。

留学して良かったということだけは確かです。

七、八期（五、六年生時留学）

普段八坂について深く考えるって事はありませんね。でも、今考えてみると、「八坂のおかげかな」って思う事がいくつかあります。

まず、一日一日が無意識に流れて行くんじゃなくて、自分の中で考えらえるようになった事です。とにかく八坂に行くと、学校で何かがあって、センターで何かがあって、農家で何かがあって、一日何をやっていたのかわからない日なんてありませんでしたから。毎日満足していたかどうかはわかりませんが、今日はあれが楽しかったとか、失敗したとか、考えるように

なったんです。山村留学する前は、一日一日何も無くて、そんな事考えなかったんです。

それから、あんまり周囲に左右されない心ができた事です。こっちの人は、固定観念で決めちゃうんです。ある人が失敗するといつまでもそれが残っていて、その人が他の事で意見を述べても、潜在意識として「あいつはちょっと」とか「あいつの意見だから」とバカにしたり、みんながいじめているから自分もやらないと遅れをとっちゃうと思っていじめちゃったり。八坂ではそんな事無かったですから、そういう奴が見えてくるようになったんです。誰が言ったっていい意見はいいと思うし、みんながするからするなんてのもおかしいと思います。

もう一つ、他の学年の人とも気楽に話せるようになった事です。考えてみれば、自然な事なんですけど、他の学年の子と話をするなんて初めての事でした。八坂では学校でもセンターでもそれがあたり前でしたから。いろんな人と話すようになると、村のいろんな情報も入って来るようになって、視野も広がったみたいです。それには、少人数で学校中の人の名前も性格もわかっていたので、話がおもしろかった事もあると思います。

その他に、八坂でわかったことは、本当の農業と村のことです。学校で教えているような事がいい加減だった感じがします。こっちの学校では、クラスで知っているのが僕だけなんて事もありましたよ。

それから一人っ子の僕にとって兄弟や兄弟喧嘩のようすがわかった事、両親と離れて違う親の子になった事、農家の手伝いがおもしろかった事等みんな良かったと思います。もっとも、こっちでは家の手伝いをしても全然おもしろく無いですからやらないです。

全体的に、何が良くてどう変ったかっていうのは良くわかりません。これから効果が出てくるのかもしれないし。とにかく、行って良かったのだけは確かだと思います。

再掲載を受けて――

今でも引き継ぐ色褪せない理念を思う

青木　高志（大岡ひじり学園長）

今回、再掲載記事についての感想原稿を書くにあたって、あらためて当時の青木理事長の『育てる会における体験教育の理念と六つの力』を熟読した。

まず、最初に感じたことは、今から50年近く前に、学校教育から社会教育分野に移り、自然体験活動を実践し、このような実践理念を構築、それに賛同した指導者や保護者の皆さんの探求・研究心にあらためて感服した。

その頃、日本は高度成長期で国を挙げて中央志向であり、子どもたちを学歴・系統学習一辺倒に評価をすることが主流で、自然教育論や野外教育論などの実践は、未成熟であった時代と思われるからだ。その中で実践理念では、はっきりと、「これは単なる理論ではなく、参加する子どもにとって、確実に教育効果をもたらすはずの実践理論である」と主張していて、それは子どもたちと共に生活・活動をし、その実践を繰り返す中で、構築された理念であると述べている。このことは、その後の私たち指導者の長年の道標となってきた。

付記されている子どもたちの感想文は、時を経た現在の留学生の作文とも共通した内容で、『子ども自身が様々な場面に直面した時、その生い立ちや体験によって得た力をもとに、課題解決に向って能動的に動きだす子ども』という、育てる会の理想像が、多様な体験群から紡ぎ出された『子ども力』から成立していることを知ることができる。いつの時代でも普遍的に、会の実践理論が息づいている証であろう。

そして私なりにこの実践理論を紐解（ひも）いてみたいと思う。

まずここで「体験」と「経験」の違いについて確認をしておきたい。

体験とは：「体験」は行動そのものに重点が置かれ、個別的・主観的なものである。

経験とは：「経験」は結果として得られる知識やスキルに重点が置かれ、一般的・客観的なものである。

（参照・正しい日本語より）

私がかつて新潟の学園指導者をしていた時に、尊敬する現地小学校の教師から『なぜ、山村留学生は根拠のない自信を持っているのでしょうか？』と聞かれたことがあり、答えに窮することがあった。今になって思えば、留学生活では、小学生は無心に遊び、指導者のもと多様な体験積み上げをする中で、自己肯定感を醸成していく姿が『他人には理由の分からない自信』となっていたのではと推測できるのである。そして発達の違いにもよるが、小学校高学年から中学生になるにつれ、多様な体験を通して、知識やスキルを獲得する経験への変化が子どもたちにもたらされ、経験の連続性を求め、このことが最終的に子どもの能動的な姿に繋がっていくのだと今では理解している。また、その多様な経験は互恵的に作用していることが、私の目の前の子どもたちの姿から読み取れる。これは経験の連続性や互恵性が、文中の六つの力が互いに影響し合い、一つの『人間力』を導くということに重なるのだと思う。

この理念はアメリカの哲学者ジョン・デューイの進歩主義教育理念の「子どもの自発性」「問題解決学習」「経験の連続性・互恵性」に通ずるものがあり、本質主義と相対する理念であるが、それを社会教育領域に、実践の場を求めたことが、育てる会の素晴らしさだと私は思っている。

文中の実践理論と六つの力は、普遍的なものだと述べたが、移り変わる時代背景をもとに、子どもたちの姿も変容し、柔軟に変化をしても良いのではと思う。現在では力の一つとして『耐性力（忍耐力）』が加わっても良いと思うし、これは実践を担う指導者たちが研究する中で、さらに創り上げていくべき実践理念でもある。

私は山村留学指導者として35年、常にこの育てる会の色褪せない理念を胸に、子どもの指導にあたってきた。その中で私が大切にしてきたことは、子どもを取り巻く教育・体験環境を創り出すべく、指導者・保護者・地域（農家）・学校が、この理念を緩やかでよいので共有することであった。

そのためには実践と研究を繰り返し、その果実を山村留学学園がプラットフォームとなり、世界に発信していくことがとても重要なことだと思っている。